慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	富田重夫著 正統学派・限界主義およびマルクシズムの体系的理解
Sub Title	
Author	加藤, 寛
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.4 (1962. 4) ,p.428(108)- 429(109)
JaLC DOI	10.14991/001.19620401-0109
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620401-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

篠原三代平著
『高度成長の秘密』
――日本経済一五講――

本書は著者が雑誌に連載した講座をもとにして、これに若干の用語解説を加えて成ったものとされている。近代経済学の体系的な勉強がはなはだとっつきにくいものと感ずる学生でも、本書ならば容易にその内容にひきずりこまれつつ、おのずから近代経済学がかつて教え、またいま摸索しつつある問題がなんであるかを知るようになるだろう。本書はそういう意味で、日本経済というものを土台にしたところの、経済学への入門書としてみることができる。本書の内容はもっと専門的な言葉と用具で、すでに「日本経済の成長と循環」という、すぐれた一書を成している。しかし、そこではファクト・ファインディングスとひとくちにいわれるもののむずかしさと、それをさばく著者独自の着想にまずひかれたのであるが、本書は、著者の日本経済への見かたというものがきわめて卒直明瞭に述べられていて、かなりまとまりのある「日本経済論」というようなものに形づくられてある。それだけに、著者の見解に対する異論も、本書をつうじて多く現われてくるかもしれない。本書をそうした討論、研究の材料として、日本経済の問題点や、近代経済学の問題点などを指摘し、それを一歩解明の方向に押しやることをのぞみたい。

内容は日本経済の長期成長にかんするものと、戦後経済成長にかんするものとに、大きくわけてよい。前者では交易条件の不利化による輸出成長力と、分配率の低位という二つの柱が著者の見解を支配している。後者では戦後経済における成長率の循環変動という事実の指摘と、二重構造下における景気循環の特質ということが興味の中心となるだろう。本書にはさらに、所得倍増と物価騰貴、経済予測の方法と限界という、二つのトピックスが収められている。とくに後者は、著者の経済実証分析に対する考え方をしるのによい。巻末の経済用語解説は、方法論から応用経済部門までをふくめ、本書のための必要最少限の用語知識を、きわめてわかりやすく与えてくれている。（日本経済新聞社・三六年九月刊・B6・二八六頁・三六〇円）

―大熊一郎―

富田重夫著
『正統学派・限界主義および
マルクシズムの体系的理解』

本書を手にする人は、まずその題名が何を意味するかに当惑するに違いない。それは読者の罪ではない。わが国の経済学界は周知のように、マルクス経済学と近代経済学という二つの体系に分割され、恰もそこには経済学という共通の地盤さえもないかのごとく、それぞれの主張をくり返しているからである。何が故に、諸学説が経済学発展のための一つの道程として理解され得ないのであろうか。

このような疑問をもつ人にぜひこの書の一読をすすめたい。戦中派の一人として、戦前・戦後の大きな学問的変動を実感した著者は、学説内容の根深い対立の中に、統一的理解を一貫して追求しつづけたのである。

「正統派経済学にはJ・S・ミルの古典的な経済学方法論を継承するJ・E・ケアンズ、そしてより近時のJ・N・ケインズの自然科学的・対象優位の思想」、「一方、限界主義経済学はC・メンガー以後、共通の認識論的基礎をもつM・ウェーバーに代表される経済学方法論、および方法優位の科学論が存在しており、さらにまたこれと調和する先験論的構成説的認識論を見出しうる」。この二つの対立的思想に対してマルクス経済学とその背景をなす広い意味における哲学的思想が相対峙させられうる。

もちろんこの三つの思考様式がそれぞれ独自の哲学的根拠をもち、現代の経済学の主要な要素となっているのだが、これらを論理的に自己展開をなす全体の契機として把握しようとするのが著者の意図である。この自己発展を著者は自覚の深化とよんでいる。諸々の科学の発展のあとを探究して、そこに主観・客観の在り方に関連して自覚の必然的展開の過程を見出すというのである。著者はこのことを三つの学派の歴史と理論、理論と政策の二大問題をめぐって探り出していく。

正統学派は法則を確立し、将来を予測するという意味での経済科学を構成した。しかし現実の傾向としての法則の考えのうちには、事実性と論理性の即自的な統一がある。それが即自的に止まっている理由は、自然のままの経験的現実と人為的秩序、あるいは認識対象とが厳密に区別されていないところにある。このような即自性（無媒介性・直接性）が、対自的になるためには、否定的媒介としての主張が現われねばならない。

この役割をになったものが正にM・ウェーバーであった。従来、M・ウェーバーの役割は、正統学派の無意識的な主体的統一を自覚的にさせ、経済学を科学の域に高からしめたものとして考えられているから、著者のようにウェーバーを否定的媒介として考えるには異論があるかもしれない。

しかしウェーバーの論理は、経験と認識とが乖離した危機状況に、相互の権威を、相互の分離によって確保しようとした試みである以上、ウェーバーにのみとどまっていることは許されない。ウェーバーは存在と当為とを峻別することによって、その主体的統一は、主体的実存に委任された。もしそうだとすれば、彼がその主体的実存において示したところの認識と実践の動的統一そのことを何故に一つの原理として説くことができないであろうか。

このような見方からすれば、歴史的発生はウェーバー以前ではあっても、マルクス学派の方法論的優位を否定することはできない。しかし著者がマルクスを認めるのは、マルクスが歴史的実在の論理として弁証法の論理を採用しているからに他ならず、唯物弁証法は物質を基体となす限り所詮過程弁証法にすぎず、弁証法の否定の意味を真にとらえていないとして批判される。

正統学派・限界主義・マルクス主義の調和し難い三学派を、論理の自覚的展開として位置づけた著者の意図は、その限りにおいて、たとえばマルクスの解釈が著者流にみられているという点はあっても、本書において十分に成功しているといってよい。このような著書の刊行がどれほど方法論の交通整理に役立つかはいうまでもない。しかしなお読み終って残る疑問はないであろうか。マルクスをさらに否定の否定とするものは何なのか。少くとも近代経済学は悟性を絶対化し、悟性でつかみ得ないものを形而上学的とする以上ここに経済学徒の求めるものはあり得ない。望蜀の感はあっても著者に新しき経済学の方法を求めるものは、あながち私一人ではあるまいと思う。（日本評論新社・A5・一八〇頁・三八〇円）

―加藤寛―

＊　＊　＊

馬場啓之助著
『マーシャル』

この書は、著者自らの言葉をもってすれば、「マーシャル経済学の体系とその体系建設の道程における方法論上の苦闘とについて、できるだけ平明な解説を加えること」を意図し